新評戲曲十種

一谷嫩軍記　第三回上　石屋之段

依田學海先生戲評　　並木宗輔著

此回分前後兩大段、本是院本陳套唯前段是虛寫。後段是實寫。蓋所謂石工弥陀六即平宗清、前段中曾不一語犯其本色、使讀者在煙霧裏著眼然不留一兩字與其眼者、不足以見其自在之筆故一點額有黑痣、以照應後段、又所謂美少年即平敦盛、叙来滅没、使人疑爲幽鬼、曾不一言著其

正身讀来讀去唯覺鬼氣滿紙然不留一兩語與有識者不足以見變幻之文故一點青葉笛以映射後段是虛寫中又有實寫處

壍頭用和歌一首何等婉約温藉前一段所以有美人才子之話不唯為便叙起老石工

安小あらゝ又かへるこん津の國ゝ住吉の松影御

是松名兼来是地名呼起石工と詠置し在世可帰語暗藏前一段主旨在裏

一木と俱小年を経し家の黒痣看官要認口くせ小佛ゝ住吉名殘唱ふ此二字

ゝ白毫ゝ弥陀六人ゝ石ゝ祇ゝ石屋有先叙弥陀六是

主實交信心の同氣同行相求朝暮勤る経の、責表佛の絶ゝ諸國諸山小建置し石塔ゝ

る戒名ゆ諸國建塔是後段伏線漫然讀去使不解其緣由　数を尽くしなむあ
だ願以此功德ふるゆえ。回向の聲も殊勝ふい。有數語故遮

宗清為平氏多建石塔是後段詰特在首段一點来法度極密不是閑語

掩建塔緣由且說彌名緣起不使遽悟其為宗清

日暮行ふ門口へ連立てゐる
石屋共。敕使殿内ふうといふ者ゆてぞんと立ち。
ゆ回行聖ふござつてゐふい大ふ軍しはふ為
業ゆ所で直ち看經。ゐた今仕出ゐ。ゆ、あがうゐ
やれ。ふむあゐぶく。弥陀六イゐれ弥陀六殿今拝ハ
珠数ゐゐゆ数ゐ惜つが遠夜。百万遍中にゐうて
誘ゐ来ました。石工語　おんふそふおやどそや案り

宗清為平氏多建石塔是後段詰特在首段一點来法度極密不是閑語

口裏不絶念佛順帶叙去妙有情致

僅數語耳將姐兒少年婢僕順手描出

留少年待在後面引起許多話頭

まちよ、句斷。是答石工語ッリ お岩。ぢだ彦助ハ戻らぬか。鬻突嘴起阿岩彦助一認其語ッレ氣知是婢僕娘が起ふら宋あくいめて飯せ。若ハ塔と祇さ去やつさお若衆が見ゝさら。戻るかで待ゝて置。姐兒少年一并向弥陀六口裏叙来不費多語又姐兒病相思意帶在這裏省却許多閑話。姐兒少年及婢僕並是客サヤござれちやつと念佛かきゆで夜食をとりそおやるまいかゝ佛も百味ゝおんお紀らちもなら茶ゝ臣食せうおよさい仏法腹念佛門義仏を口ふふお迷てらそ急行。約略叙来弥陀六及姐兒婢僕等為小段落 ゝ下人の彦助が拐の先ゝぶらゝと。網繩引かけ立帰り。拐繩

把弥陀六排一邊去以下說起美人才子情話只借此一句

描々擺々二語狀得撲魯人物活逼真

借婢僕問答語呼起後節文字不但說緣由亦滑稽諧謔使不寂寞

是挽石具ヤレ　くたんどやお岩屋肩も腕もめりくいふ
不脫石工
ハ、是僕ヲ、色理く咲茅引そして石塔ハ建ますこと
語
ウ是婢ィヤまゞ建ハせぬが、お是や内ふ用があろ
語
と思ふて先へ戻つゝが、旦那殿ハ奥まろ、是僕ィヤ
語
同行中ふ百姓遍がそて参らたやつゝハいの、是婢
語
そんなら幸ひ写小雪塔が至此始見其名順口呼出病氣たや
さ引こんでごぢるハ彼石塔を祕さたやつふお
ぢ死ふ恋煩ひと見くふハ違ハぬ。說害相思病来由焚應前節弥陀六語旦那
の耳へ入ぬ内美見せうぢやそまいゝ、是僕ィヤ
語
小片段亦用一頓跌然後入行媒雖慣用法不

可不知

婢女自成婢女語懼怕膽怯與奴僕語不同

入行媒一路婢僕問答畢竟為博得此一句

やうも如左ハふい、此間うらいるくといふてし、いうるく此意ぐ叶いるゞバ井戸へ身を投るの。首おかて死るのと。こいいるゞ升いふておや。是婢語そをやいやあこつちやのゞそんならかうおや、たつふ一度でおひ切おやれとやつゝ合点さしていつそ逢そおやるまいか是僕ハテもふせうるゞるい、幸今夜お茶屋が見へる苦志やゞ是婢語其間ふ上那ぐゞ是僕語。用歌後語直接婢語亦是省字法ア、何のいれ百萬遍れらちやつとおやるまい、ゞア娘ほ上其譯いふて

行嫌用不著奴僕必須女婢故亦把彦助排去一遣正是排弥陀六去一様文法

前節一轉寫出凄凉光景鬼氣逼人使看者疑是少年全然爲幽鬼

工面さつちやを。おそや寐所て彼時分獨角力を取まをと云て。徐手と奥の間へ別をてこそ入ゐけを。鄙猥語却不說破又無是等藏諱不得說出後段情話 既よ其夜も丑満の風おんくと更渡ゐいと物をこの時しもあを。此一句是出少年 扨。とうの聲ゆ。名ゐ。聞ゆをバいとゞ。怪心。ゐそはといぶうゝさ。此一句是出姐兒 小雪ハ部屋と立出て。灯火ゐ。げ窺へバ。窺字寫出許多嬢娜状 門の戸不とく打ゝさ頼まをうくといふ聲ハ。やゞふ方なきお茶衆揚ゃ嬉しやと飛てゐゝ。不先寫媒人直寫姐兒然後漸次叙来不是板 戸口と

初迎將入來反不赧羞就坐了一頓羞縮寫出小娘子情性酷肖可愛

應答套語若從姐兒口裏說出來大覺無味婢女話頭妙於順滑

語氣蒼涼自是鬼語不必寫其衣服顏色而這一句并狀貌描出來

呼てようそお出。くこちべと体ぶて下に居る間も胸せいれ。急忙裝得妙顏ハ上氣めちぢ梔指直いてもじくと。挨拶も出ぬ其内ゑ。お岩が聞付走出。姐兒發不得一語便借婢女口頭說出ス是ハくお為方様、今日お出の約束故、只今迄待すとぐなぜ更てお出ふされ。是婢語さきバ手前ハ少様子もて人目を忍ぶ者なもを盆ハ。勿論夜迚も。密ふ時刻と。心げけ。態只。今。奈しが。故成荒涼語使看者疑是幽鬼先達て。祇置た石塔が出来ますゝら彼地へ建て貰たさ。故不說建塔地留後節餘地先日亭主ふ達ますさ

少年對婢發問當須婢答反使姐兒答之使妙處置

漸入蔗境妙用摸糊語自然有是等光景

婢女是姐兒替身姐兒

い是少年語イヤとゝ様い只今留守でござりまそが、おまへがお出ふされふさら待せまして置ふと。ハテ、お岩。是姐兒語半對少年半イ申付て出られまい。ハテ。把姐兒答語半對婢女活是處女口氣

截從自己口裏說出活是老世事的婢女口氣

帰られまそ迄名代い此娘様お咄れ相手ふして。うで、参つ。やれ〳〵面白つ。とかく お心安ふして進ぜて下さりませ。是婢サ語奥へとも、ひまろ、然らバ左様致さうと、何の心もつる立て一間一通る。後うげ見送るお岩が手紙折て。デモ扨も能器量あれ様ふお若旦い日本國を尋ても

心裏包着多少情話都被婢女說破

褻狎話頭反以滑稽說出来只見可笑不見可厭是護短妙法

行媒既用著了乃排一

今一人とそまい。少年容貌從婢女口中說出以補前文 ゆゑさちやんそもそも理くちこがこれ小雪掻うち付てごげる所だやふいちやつといて教と通り、何ゥなしまあッ母ッら抱付て、こけッぶ忘いぞ。やまを上へるらぬやう下ッら値分ッらぴるされ、櫻媒語不叙在正文裏亦從婢女口中說來為姐兒留身アレ まだうぢうハもどかしや、サアまふとむりやりて、押やり突やり行ぴつちやり、ア、世話やの、どふやらかうやら首尾ふつて、是ッ、休ま必と俺なれ此ど。だつて、一本の礦ぶ、に傳の餅搗やう

邊去直入正文

如滅如滅文字變幻鬼氣撲人

此段若說風流情事即是凡手如此說來始見變化之妙

で。深られそむないよりじやと。與前節彦助語一樣反不重複婢女自成本色

語便好

いひて掛手へ入れば小雪は立出興さめ顔もめんようふお前流様。慥ふ奥へいかちやん

したぶ。かいくれ姿が見へぬはどふぢや前節漸層說入此段

讀者意有風流情事不料悲愴淒切變箇鶯啼花笑佳境做他猿叫草枯光景

るく尋る内。こゝふふの障子さつと明。イヤ爰ふ居ま

そはいの、是少年語　色はきつう意路の悪い、いつの間

ふ拔ケふさつくの男ふ拔もない心ぢよいお

方じや、是姐兒語と云て傍へ指寄レバ。一逼妙　恥しさつて。一頓妙

ア、これく、始終の孫子と見ゆふ付流し給人の志、嬉しいとハ云なぐら、彼方ハ深き孫子にて、仮にも妹背のうたらひをなすと叶ぐそ、縁組なる前生ゆ、約束ならめと諦て、思ひ切て下されと、いふも道理の氣の毒ゆ打ちあたる其風情、讀首節猶不覺

其為鬼為人至此全然是鬼誰知讀至後段即是生人其與姐兒没情所以盡義以婦不有一語無来歴

小雪ハ、つと力を落し礒孫子ぐそ迚も色程ふ思ひ詰心と盡そうひもなく情ふうもふう捨ていやとおつしやまるや生てハ居ぬむごい雖面お心と恨怨けぐ此是奪語

一再讀是全然鬼語細讀之反是確有來歷所謂塔成便不再至者眞個生人避禍逃難逕路所以讀至後段無此障碍何等剖析何等精細

不必說只是呼起後文少不得此語

いやとゝ恨ハ去事ふゝら逢ハ別の初といふ礫ハ洩ぬ涙身の上頼至たる石塔が今ハも成就去てあらハ前文許多曲折殆把建塔念卻在一邊至此再一提再び此家へ来らぬ故。逢見るもハかゝ。只儘ならぬハ古のふらひをうるさ物ハ人の身ハ一ッ生ハ皆夢と思べ。さかゝ迷ひ給ふ又成鬼語比前更覺悲愴去ふがハ今伐ハかの孫きらいくバ誰しも名殘惜い物哉ま慈しき折うちハ心のいさめ共なうんいびく筐に奉らせんと錦の袋押ひらき青葉さゝ。

未通殷勤先遺記念物測之事情殊不免鶻突然不置此一語恐失後段線路此是作者苦心處

笛竹を看官要認著笛竹二字渡る心もあぢきなく裁く身は
きさぶらふ迄理ふ向ふ矢先ハなく主客情貌描盡兩句裏
ひよんふ事ぢやと是姐兒語此不但姐兒意中言看官亦應做此想いふまうあ
詞も涙ふくれるゝ折ゝ道ゝ口ゝせふふむ
あこぶるむたゝだ六阿弥陀接連寫来并見其口氣妙逮夜ゝいきせ
き戻り門の戸を叩くと打きゞけバあいと奥
うち返事して出岩がかけ出此處要用著婢女旦那様のお
歸りそふふ是婢女對主人語こゝ小雪様折角癒ふるはまゝ
あなたゝ此侭で思ひ切おまくの心がいりふし

叔拾婢女不滲漏

何早一語若在平常不過套語此處一點妙具情致

てもいとしくない。せかせて来の心ゆるし此間ふち
やつと把付ふれとむくふ押しやり座ふあり戸
口伐吹一面帮助姐児一面請迎主人二箇婢文須兩般周施伏待著忙處寫得好旦那様早うつ
たゆの早くろ百姿ぐんぐらくと興阿弥陀弥陀六是一様筆法
の吹しで斗かもそう夜ゲ更ふぶむあこだくヤ

弥陀六語々著急是心裏包著許多感慨来

處々不脱念佛御客衆ハござつこう是弥陀六語サア其御方ハ是婢語慌忙
状如見ぞふぞやく是弥陀六語サ、さつきに見へこけまど恥
しいつくう門口でうぢかぶくをいふふそふ
ふもてくそふ伐もぞしくぶつく娘恨がはあこ

又是狎褻語以滑稽說出来不落淫書一路

弥陀六是宗清姐兒是主君小姐自然所這話不免著忙急問讀至後段始覺其妙

いらしぶされさいふ（是婢語。故成糢糊語使養不知養處）ア行おや娘が（是弥陀六語）ふもいらしかう（是婢アイ語）ふむあ。だく。（是弥六念佛不別）旦那様とおたるが悪いやう（武門口著一語妙極）ふぶぶつふ我内べをいらしなかまとおぶふちやいふ（是婢語）そふおつろといくばおいふどふやら紛ーしうつーでそうと思ふた（句断。滑稽語不要）

潔煩反是好

どどやお目ふのくろうとおつと通つて（不說見少年只寫虚席模様情景並見）是ハく嘸お待遠ふごさうもちよ拙御詣の石塔今日の約束（きやくそく）ふをや夜を明ついで

姐児對少年不發一言
反與父親說話活是處
女模樣

少年一来一去似没甚
麼關係不知玉織姫見
殺敦盛失配鉄這團圓

漸出来し今朝うら若い者共に運ばせたが（與前文僕提扇）
索相炤應不是閑語　大ふ建たてござりまらよ（是弥陀六語）それハ
嬉しやいうる世話でござった（是少ィャ年語）世話ハ家業
おやがお氣ふ入さらあらも仕合アはらふ
下さりませ（是弥陀六語）成程〳〵図色たて参りさい（是少年語）そ
んならお供致しまちよと立て用意を取急げバ
こレくと〳〵揺ると一所ふりたいいふそるやハ
でハテ石塔の恰好ふ（是不必說ハテ成後文来路）拙もけもないハ
のるれぶそるるで爰やあそおのはおやる殊

作者揑造一美人来為那替身

ふ夜道おやあるいハそとせど門おしてようう
留主せいっりお岩そちも傍ふ隨分氣を付不漏婢女
誰がくふ共りんまくてつ。をいらそなよ合点
前文サア餘波く お出と打連立急でこそハ出て行成二小月段落
おさやげき夜もそがら。四方の景色もそこのぶ
先叙月色る 光りと覆ふ雲ふらで。雀のやどりうぐゆくぶ
ま。松の林ふ風あれて。汐の波ぬおのづから音も
そげしく打寄て。高根ふひびく山彦ハ次叙風華とうく
さつと布引の瀧叙路次のおら糸ふ。そと人のと。

漢土小説寫景描情非不妙然寫景只是寫景描情只是描情用筆自別殊乏自在此段前後錯綜情景並寫一路文字如見兩個相携行走章法絶佳

仍利天上寺摩耶山遥呼起後文敦盛母藤夫人来

いかふかくさ百歩ばかり藪池村里も急て仍利天上寺摩耶のふ山をめて山見て歴村落去至海濱行道筋も無らぬ脇の濱辺や磯伝ひ神戸も跡ふ湊川流るゝ水の淀ならば爰も徒橋うちや渡そ舟を守りの神垣や森も茂げ山て置露の垂水ゆ里も早過て彼ば程ふく上野山一の吾ゆそ苦けるの日希引

五百崎曰藪池曰麻耶曰神戸曰湊川曰継橋曰垂水曰一谷透層順叙地名不但記来路且寫奔走一夜天色欲曉

寫得突兀不啻石塔

近ゆ横雲のたゝびく空も青こと枝葉ゆ花ゆ松ゆ木ゆ花ゆつゝ丘た御彩石遠目ふそ秋とこ

若將建塔為弥陀六自
做補工一節無可安置
若無補工一節撤開少
年不得而疑鬼之意無
所安著

首段既稱弥陀六爲老
石工然未見石工模樣
此處一點做工毫不滲
漏是作者精細著意處

ご六が走寄て是おやく先達てきハされと所出
ふ合せ弟者字ふ古付ふりや建ハたてふぢちか
ふり笠ふふりぢちと押直ふてたかつそが急つ
只指示石塔便一直極不成文
字故把此數語點綴一頓有趣
恰好見て下さうませ何と
ごけうこけうすせうがやそからふるしいれふい掾
ふ聽を合そハ坂合と懐か蓋物取出ふ重の際く
塗所へ有此躭閣時刻便撤開少
年不見所在以生出後文
山畑ハせぐ百姓共鋤鍬
ふかげどやくと面かかふて是早辰
應前
石屋の恥
仁屋ハ是農
夫語
おい、やいこそや皆とうから情が出

此是早晨農夫趁耕時候不見幽鬼恰好彌陀六六管低頭做生活不知少年去已久句對農夫句接少年。於農夫叫賣方纔喫驚寫得妙極

るゝ是弥陀六語はいかちとらよ生こなたがとうからあ
ぶる所へ石塔を建さるゝ。農夫語此時少年既已去矣
のくハ業為おやにかゝるどこでもふの持建で
建ゝ所ふらぬが。誰人が造有ふやつおやの父一農夫語
農夫不見少年故有是語
ことはくしぶとく麗相去まい其施主人が
愛うごけるそ。是弥陀六對農夫語
ハ為庶務ハ牧丘でも。三悪を伐道ゝといふ
まして大そふ此石塔とおなじふるハ情害結
ふか為庶塔。往情ふか志でゝ。是弥陀六對農夫語年語而不知此

年不在 就仁殿、お茶を揚げ施主人のと、人もないふそ
ばこや何のいいもの。是農夫語 何とハていら目がさめぬ
ふ。是弥陀六語の興 天将曉語緊相應 とまたどうふ人がおるそいの農夫語
ハテこし爰ふ句断 ゞほんふ見べぬハかんこうふ。ふ
つふ今迄爰までもふがゞどつちへござつまふ。
お茶を揚げくとうべバ倶こ百姓共爰ゝそこゝと
尋る所へ娘の小雪がかちらぶし息もそ切く走
付 姐見欲往見建拾語平 此大有關係 お茶を揚ふつつと一言いひたい
ものぶこてきたちまつと逢して下さんせ 是姐ヤ見語ヤ 逢

寫小姐喘吁吁状如見 此段寫處女不費多語只是一兩句状態聲氣都出

して呉るやふい銭も取も足へぬいい（句断是弥陀六對姐児語）
親仁殿お為れがあやうねば忽こなたの損ぢや
ぞやほを知てう但先銭でも取て置ぢやいさう
（是農夫對弥陀六語）いやてや仁躰が能うら所も問ぞ一銭も
受取ふんぢ（是弥陀六語）ぢ夫でよめた石塔とかこ付ふ
伝ぞせーめる下ユ梅ハ御ふ極つさをくいうせ
まいぞつうけんッ皆こいつと立さんぢ（是農夫語有此數語挑下文）
（此數語挑下文）ヤこれく待ちやんせいもやちんふさも
ーい心ふか方でいまいまい所添挑ハうーふやる
（青葉笛是呼起藤夫人）

とて、六、此筒と（是姐児語）貰ふたのう（是弥陀六語）ハどれくこと
やまあ袋が強樽ふ赤金綿ぢや（把外面賞賛一番）扨笛ハ生
竹でもないが節くらちつとう枝葉がるく（従農夫口裏形容青
葉）いろ揚是伐銭ふせうふら百が物ハ有ふ
笛
ナニ就仁反（是農夫語）ハテ扨何の銭ふなとふ夫も娘が一
でいふこのぢやこんふるめらあくうで半銭
取て置さらもんざら損もせまいふ（此等語故使看官不猜著弥陀六為）
宗清若説二句本色語素然無素）あくむごたらしいふあふさと悔
かいもあら笑止やこだ六ぶぬかれいさと傳つて

評留譚語不従弥陀六口中説出反従農夫説出来此是主客法

不説不當百銭直説當百銭反妙

後段陣營一段至妙文字此處先把藤夫人為線索聯絡前後兩段

法師は涙を拭ひ手帖を取出して、此時ちらと忘れたり。用滑稽語為頓住時しも法の松原が點綴海濱光景見早ふ

ふ女は何者成と云ふ中に走近付の藤の局こちらつと抱とりふ舟寺はどつちぞやの教てたもとそけ色ば此處出藤夫人遂ば、夫は色うちよつ程遠照前回以起後同いが見れば賤しうふい女中の、ちつた一人ぐらちそどで何故寺を尋さつたやる、是農夫語されば、ちりく指子有法が追手のかいか者。おびらくうげと憶ん為伏後文一段熱鬧と。宣ふ中ふ目早くも嫁が

青葉笛亦在此處再點至後段更為一焰應

敦盛玉織兩個死狀不從弥陀六小雪口裏說出又借農夫目擊之言乃能動人

持たる袋を見付なほそれちよつと見せてと。手ふ取かへば紛ひ無ぶ青葉の一笛。前文是青葉笛弥陀六與農夫傳觀詑奇此處若在農夫若弥陀六手裏殊不雅觀今還在姐兒手便於藤夫人取見之極為怜好是ハ我子の敦盛が肌身をふさぬ横笛どふしてこゝにの手ふるとやて親ゐも不審顔百姓共口〻ふ。ゑ敦盛といふ人ハ。此間の戰ひ。源氏の侍熊谷の次郎が手ふかいり。死おやつゝおやかいらいなア與次郎。是農夫語其時ふいぢらしい。句包著多少慘酷光景在裏面玉織と やらいふ内裏上臈も殺されて居さげる。是又一農夫語。敦

と叫て呼吸ハヤ行敦盛ハ討まいらせ

福原の館ふて母様所をでおさらばと玉織姫

共いさぎよいふがふが此世の勝色出ふ別まふ

成たうと、哀両個是為二様説

そしる共とさ立人目も恥ぬ

さうけひ注前後ふうふ見へふけるにゃこれ就仏

夜合点のいかぬ為が宵死ちやてく敦盛様があの

笛の主ふれぞこふたふ石塔祇ふが為なとひと

つおやふいか是農夫語いふも是弥陀六語サ其死ご人が来そ

ふふ物おやふりぞや是農夫語いふも兩箇應答一様字法方見得狐疑躊躇様子

若説藤夫人一見青葉笛便言少年是幽鬼反傷道徑此處借農夫言説其曉蹊妙極

威玉織刃為二様説

前文幾層把少年做幽
鬼模様然末肯断為幽
鬼至此弥陀六口裏説
是幽鬼與後段宗清説
或是平氏一公子似相
矛楯不知此段故為糢
糊語遮掩来路

はゞかへた。さつきん爰迄連立つてきて。あのく抱の
いふ中。うきけを捺ふ久へるんだハ。扨ハ幽霊で。
ござりましたか。（是弥陀六語）といふハ皆く興さめ顔。清盛ハ指
も悲しげの思ひいやまさる顔ふる小雪も始終とんと
ふ。付たる。うなじりやと斗ぶりて（姐児不多出語唯此一言有多少悲痛）倶ふ被。
どこおがりける折ふしに遥の松かげかむらく鳥の
博がばくおさまる大勢。こだ六が。あまこそ性ふ
返手の先くあるたを遠そふ幸此石塔の後へ
と（石塔後於此處一験）御首の手代取忍びせて何思やる。いづ

前文鋤鍬復於此處顯
醜農夫自有農夫換様

忠太運平兇惡反帯些
滑稽此是院本慣用脚
色惜不免依様畫葫蘆

色も、追手のやつらが此所と、そふとふ通まぢあ
ふたの仕合、若も何うぶ、みぢでふ。色迄平家
の領地ぶ住ぶ御恩の為。一下働せうぢやふいい。是弥陀六
語。語々野人樸拙語ヲかてんふ鋤鍬のむ孫打ならハ
不露出其為宗清姻
せ、ぶひふくろ。是農夫本色語といふ間もあらせ炭砂煙疏
立踏立うけるハ、梶原が陣背番場の忠太須磨
運平先とて、數角引連ぢつと寄、百姓共、三
十余の女一人此ゆへ、そたでるふどつちく迄て
それぬ、ぬせ、ハイ成程く生女ハ、アあれ迄我樣切ふ

是弥陀六語 演説侍ひふ走つゝ 是忠太語。両箇各一句間々、も雑成語雖是慣用法亦妙

ふ二三里もいかせう、追手の元ふら一足も、早う

ござれとせうそきぞ 成小波折 扨こそ道そふ皆こいと

うけ出そもりにて立留り、運平が耳ふ口、ちめし

合せてこうげふ殺し演説をはしてうけう行、又成

一轉折。撒開忠太去聾留運平數箇所以容易殺得 ゑ打ふがめ ア楽だや此間ふ、

早ふと法蓋を出しこりさ娘あなこ一人ハ光束な

い寺迄送つく内へいもちやつとく 出姐児為青葉留引子留既歸藤夫人姐児無所用然安放失所則不為文理令伴夫人同去極為妥當 といふふへ里ひげふき

忠太運平兩個率兵卒數十人與農夫五六個對敵即一戰敗陣縱然小說殆非人情此處特留運平及幾個被農夫殺散果有個緣故

農夫言語自嚴魯樸陋爲得妙

木彫の須股運平飛で出やどこくゝからう有ふと推量し忠太ゞ系と孫し量ゝ、早ふ所臺を渡せ、邪ゞひろぐとかゝつぷ。そつ首ゝろゝ打落そ。伺とくゝと割まゝ運平是打謡自成首尾百姓共せゝら笑ひ、やいそつ首めそつくいけとゝいらがりでけ動く間ふうつくをとして居ようふうい、ゞ相手仕るおや、手早にこい。とてんでふ鰍大熊ゝ折てかゝまゝば是農夫本色運平始め數多けゝ来も一刀小振連く渡り合打あふ傳ふこふ六が以所臺振回ゝ

逐忠太救夫人可以止而必殺運平若運平不殺後段不得捕弥陀六来若弥陀六不来不能成後段結局作者之用意如此

く。娘も逃てよとあせる中若使弥陀六動手與農夫輩一同急事友不成體面如此輕々叙去自好元来逢坂の百姓共、撓先揃へてうちさかれたとしふまを打ふぐり、運平を追取ちき、投ちりふんだりけとばしたり、寄てかゝつてくれつく急所ちやゝ常りけんうんとのつたふ百姓れバッタリ死ぶハと逃げふ家 收去家僕又追うくるを、こゞ六がコレく待さと呼ゝへし、居蓋の雞冢を救ふ為、ぶつちらを平でまいふ、六、死ぶまや虎がむづかしいぞやまあどふしたぬ拙であるどふといふふらふ逃ぐゞい

追兵敷夫人正文至此賜完以下打諢全是餘波

里長純是滑稽此一節自是一篇打諢文字在前後兩段中間使讀者不厭倦於全篇趣旨洒大關係

雖沒關係農夫等殺却運平是為弥陀六所捕緣由作者於不用意處亦能用意

ア皆ござれといふあへ、うけてうる庄屋の孫作、死骸見付て、扨こそ一人もらさず素ぬらぬぞや、皆ようゆきやる。今、梶原の郎等番場の忠太といふお侍がござつて百姓共が狼藉しぶ不運平を殺しいる由ふつくいやつ、弥ら、ぞ引出ぬべしと。厳しい云付。忠太不自来責發遣里長以成此一節打諢若為自来責無可安放

ア、ひらんふるまておらふ迄後害をうけるこ迄ふりつさら殺こいおおやといふふ、皆く庄屋の中にぞ六そ〻寄、弥陀六是主不可不言殺

したといひおやつくいハ大きゑ間ちがひ。あまや目ぶくふて死だはおや。そ衆拠ふハハハ、死骸ふ一ッも疵がふい。弥陀六全副是野人撲拙模様不見半點本色留為後段種子ゥ夫が定ふらおらも嬉しいドくとかゝらだを改め、ゐんふどこんも疵ハないこゝやあつちのゞ大きる麁相テそちゃ直ゞ教さぬゝふハ行のこいるすなハ此中でふ物いふ者こつた一人いてさつでうと云詫ゝゝゝ海ゐるぞやゐんふそふどやゞ誰がよゝろふゝいやゐ毛年の功ぞやこゞ六いゝもやもイヤ

這里長平生慣看戰没尸骸意没刀創的不是真死好笑

鬪歐殺主謀是弥陀六理當至官分辨今借念佛為僻躲避是又好笑

いくらハ名ハぬが、おまやロくせの念佛が彩ナ。ふ。成て。ぶ。もふ。ぬ。亦不脫念佛字與首段照應そんなら武庫屋が指圖せう、日比ちよびそはようおやづる雀の名告やらふかい是一箇ようもやあんまり口早で、何のこつちや詰が知まい、拙ハびたやのおかゆ懸つかい是一箇おまや新が鼻へハぞといふて。丹兵衛ハ咽がごろつく、是一箇與次郎ハ歯ぬけこ、是一箇指詰又ハおいをやを。是一箇。以上五箇人物與次郎一人イ、いや、こちやどもうまそいいのハテ拙を掠ふ讓合て

又平口吶是院本所載故事借来點綴華力自在

不說頭初并里長充闇
數說偶然剩得極有曲
折

埒が明ぬ幸爰ふ石と運ぶ縄が有芒で鬮取さる
らよう石餘波そそやいやおふいいさぬやう、代
庄屋がきてくると、手早ふ縄切、淡てもちやくち
やひん掘り結んざの代ゑゝ者がいくれだや
ぞ、とれいもよッ市かゝど主とアやる和國迫
つて見ことてんでふ縄先引でまだ、あゝぬ
数ゝんでおふがコヤ一筋余ふ、ハテそそやぬれ
縄だや庄屋殿とうたやれ是農夫語 ゆんふそふだや
おれがとろ、アひけく、たもしうらいるでく

末段撥絃伊調一句断一句續故成柳折不得一氣讀過

ア、ヤ、なつかしやいくばく悲しや緒んざのハおき
おやをく是里ア長語在所殿いりたやまく是農イヤ夫語待テ
よおアやいふ筈がふい此場の孫子を知てゐ
るといふぞ云澤をる筈おや是里デモ長語鬼ガ當つく
物是農夫語そんなら家一度是里イヤ長語仕直しハふらぬ
くむういいぞといふたやれを寄てかつつく引
立押立ヨイハサツサ是ハかいをく。ヨイヤサツサ待てをれん。ヨイ
ヤサツサ了簡ヨイヤサツサあんやうぞうく。ヨイヤサツサおつ
立ひつ立ヨイヤサツサてヨイヤサツサこヨイヤサツサそ、